

研究所だよい

(発行) 土佐清水市教育研究所
二〇〇八年七月十八日
第二七一号
問い合わせ(八二) 三〇一六

こと言の重さ・・・

最終回

最近、ある試合の審判をした時のこと、両方のチームのベンチから「おまえはアホか！」「バカ野郎！」「下手クソ！」などの声が飛び交いました。そして、「殺すぞ！」という言葉までも・・・私は思わず耳をふさぎたくなりました。いったい誰のためのチームなんだろう、よほどの信頼関係ができていたとしても、自分は絶対言えないと思いましたが、この指導者達の人権感覚ってどうなってるんだろ。うと、さびしい思いにもなりまじった。もし、このチームの生徒が、指導者の立場になつたとき、いけどなと願うばかりです。に、「先生は、バカとかアホとか、言わんね」と言われたことがあ

アホとか言われて、気持ちよく、がんばって試合ができる？」

「それよりは何かできてなかっ

たとか、もっとこうした方がで

いて、言われた方がやる気がで

てくるろ？」と答えたことで勝

てるチームにすることはできな

いかもしれません、私はここ

それしかできないと思ってい

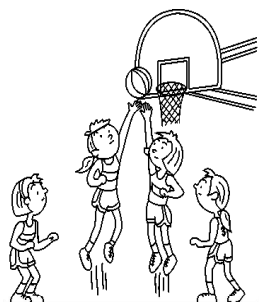
それに私の経験してきたなか

指導者が選手に暴言を吐くチ

ムは、選手が失敗したなかまをせめることが多く、接戦になればなるほど結果が出せないことが多かったと思います。また、指導者が審判の判定に文句を言うチームは、選手までもが判定に文句をつけ、自分の失敗のた

びに審判のせいにして、次への切り替えができません。そんなことを感じます。

これまで長々と自分のことを書いてしまいましたが、私自身、いろいろな言、ひと言にいろいろ憂してききました。目の前にいる子どもたち、いつまでも心に残るひと言、元氣の出るひと言をかけられる人間になれたらいいなと思っ



(文責・山崎)

教育相談講座だよい

Q-Uの理論と活用

■Q-Uの目的

- ① 学級の今現在の居場所を知るため
- ② 早期発見・早期予防
- ③ 教師も子どもも元氣になる、嬉しくなる学級づくりのため

■構成：2種類の質問紙と自由記述で構成

- ① 「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」→学校生活意欲
- ② 「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」→学校生活満足
- ③ 自由記述アンケート

ウラ面に続く

■しくみ

① 「やる気：アンケート」

学校生活意欲尺度↓三角形グラフ・折れ線グラフ

小：友達関係、学習意欲、学級雰囲気。中：友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意欲。

「やる気：アンケート」から学校を「心の居場所」として、自分は受け入れられていると感じているか、生き生きと活動できているかを知ることができ

る。

② 「いごこち：アンケート」

学校生活満足↓プロット図

● トラブルやいじめなどの不安がなくリラックステキでできているか：非侵害得点/横軸
● 自分が周りから受け入れられており、考え方や思いが大切にされていると感じているか：承認得点/縦軸

「いごこち：アンケート」から学級集団が児童生徒たちの学校生活を充実させる条件を満たしているかどうかを知ることができる。

■プロット図の読み取り

○個人の心的側面

児童生徒が4つの群のどこにいるから、学級への満足を把握する。

○学級集団としての状態

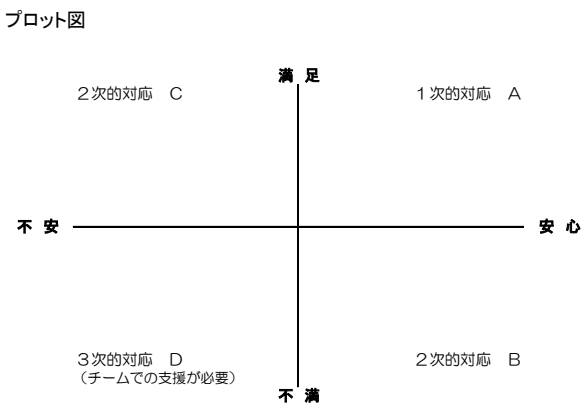
児童生徒たちが4つの群にどのよう分布しているから、学級の状態を把握する。

○学級における生徒の関係

学級のリーダー、気になる子、グループ関係など、教師の持つている情報を加えて、様々な視点から分布を見ることが、日常観察だけでは把握できない人間関係や、児童生徒と学級の関係が見えてくる。

○学級における生徒の関係

学級生活意欲尺度の折れ線がどのような状態になっているかを調べ、さらに自由記述を呼んで、その子の心的内面に迫る。



■支援方法について

A 「学級生活満足群」：1 次的対応

B 「非承認群」：2 次的対応

・学級内で一人一人が評価される内容や場面を多く設定する。児童生徒が4つの群のどこにいるかから、学級への満足を把握する。
・小さな頑張りを見つけてその都度ほめる。
・学級で児童生徒が楽しめる場面を意識的に設定する。

・児童生徒同士の間人間関係を育成する。体を動かしたり、リレーシヨンが拡大するエクササイズを実施する。
C 「侵害行為認知群」：2 次的対応

・トラブルがあった場合、どういう理由でトラブルになったか感情を含めて話し合わせる。(相手はどんな気持ちだったろう。)

・一つの活動に取り組んだ後「協力したからできた」という体験を仕組む。活動の量ではなく、質を高める。
D 「学校生活不満足群」：3 次的対応

・日常観察を行い、意識的に言葉をかける。
・個別面談をする。保護者との連携。教師が、1対1でその頑張りほめていく。
・そのままでは、構成的エンカウターの実施は不可能。
・要支援群：学年、各教科の先生方たちの協力を仰ぎ、チームでの対応が必要。